

## 和歌山という名の、優しい時間

王 新進  
教育学部 交換留学生 中国

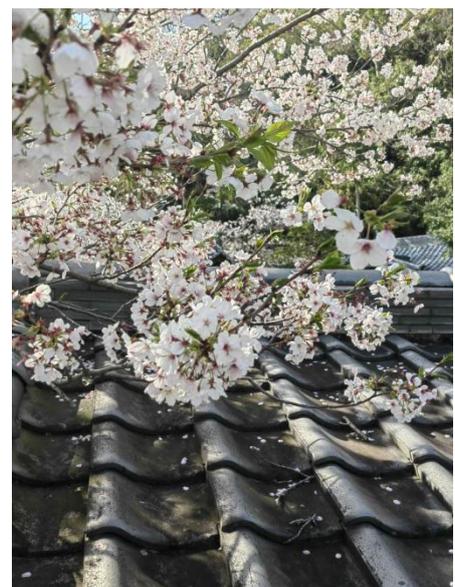
昔から、私はあまり外出しないタイプだ。旅行に憧れはあっても、いつもさまざまな理由をつけて自分を納得させ、映画の画面越しに世界を見るしかなかった。私は自分を変えたかったので、学校に交換留学のプログラムがあると知った時、迷わずこのチャンスを掴んだ。そして、未経験の手続きをこなし、ビザを取得し、日本へ行く準備し、ついに和歌山にたどり着いた。

失礼な話だが、和歌山と言えば、まず「乗り間違えて和歌山に流される」（大阪観光に来ている外国人がよく乗り間違えるらしい）という話を思い浮かべた。しかし、和歌山を目指す私も日本に着いたばかりで、どの電車に乗ったらいいのか困っていた。日本で電車に乗るのは初めてだったので、グーグルマップで和歌山行きの電車を調べていた。ところが、特急、急行、普通など、さまざまな種類の電車が表示されて、頭が完全に混乱してしまった。それでも色々と調べて、大きな荷物を抱えながら、何とか和歌山駅にたどり着いた。疲れ切っていた私は、和歌山の風景を楽しむ余裕もなく、ただ寮に向かった。5階の部屋に着き、外を見た時、夕焼けに染まった空と日本風の家々が、まるで映画のワンシーンのように目の前に広がった。その瞬間、胸が熱くなるほど「ここに来てよかった」と心から思った。

中国には、「日本の魂は田舎にある」と若者の間でよく言われている。これは悪意のない固定観念だと思う。高層ビルは少なく、田んぼが広がり、その代わりに澄んだ空と新鮮な空気がある。和歌山の小道を歩くと、遮るもののない空が広がり、犬を連れて散歩する人々が立ち話をし、カーテンから時々猫が飛び出し、電車が鈴の音と共にゆっくりと通り過ぎていく。世界がスローモーションになったかのようだ。来たばかりだが、和歌山の魂はこのゆったりとした生活リズムにあると感じた。賑やかで騒がしい大阪よりも、和歌山の雰囲気が好きだ。「和歌山に流される」のは、実は良いことなのかもしれない。

四月に和歌山に来たので、ちょうど桜の季節に間に合った。今まで動画や写真でしか見たことのなかった桜を実際に目にできると思うと、興奮を抑えきれず、早速桜を探しに出かけた。和歌山の桜は関西地方でも特に有名だ。観光地だけに桜があると思っていたが、和歌山には「特定」の場所はなく、通りすがりの小さな寺の横でも満開の桜が見られた。ましてや和歌山城の桜は格別だった。周りの桜が雲のように広がり、天守閣を優しく包み込んでいた。思わず見とれてしまうほど美しかった。

また、通学路では藤の花も見かけ、スーパーへ向かう途中には「花を大切に」という看板もあった。和歌山は至る所に花が咲き誇り、季節の移ろいを感じさせた。





もう一つ特筆すべき点は、和歌山の猫だ。和歌山と言えば、多くの人が「たま電車」を思い浮かべるだろう。電車のかわいい外観と内装は、猫好きの人々を引きつけてやまない。それ以外にも、私が見た和歌山はどこか猫と結びついているように思えた。まず、和歌山大学のマスコットはオレンジ色の「和大ニャン」で、猫好きの学生たちが集まる「ねこねここねこ部」まであった。よく行くショッピングモールには猫をテーマにしたベーカリーがあり、道端でも多くの猫が散歩していた。猫たちも、和歌山

ののんびりした雰囲気が入っているのかもしれない。トルコには猫の都市—イスタンブールがあるが、私の目には、和歌山も猫の県だ。

最後に、和歌山の優しさについて触れないわけにはいかない。聴解と会話に自信がなかった私は、最初は苦勞すると思っていたが、国際交流課の助けもあって、日本に来たばかりの多くの手続きをスムーズに済ませることができた。授業では先生の話が聞き取れるか心配だったが、先生方は自然に分かりやすい日本語を使ってくくださった。授業中も休み時間も、みんな笑顔で楽しそうだった。これは、通りかかった寺の入口に貼られていた「笑顔は幸せ運ぶ」という標語そのものだった。和歌山大学での生活、和歌山での生活は、私に幸せを運び続けてくれた。

たった二ヶ月の間に、加太や白浜にはまだ行けていないが、周辺をぶらぶら散歩するだけで、和歌山の魅力が溢れているのを感じた。ゆっくりと歩きながら、心から「和歌山に来て本当によかった」と思った。

# 名为和歌山的温柔时光

王新进

教育学部 交换留学生 中国

一直以来，我就是个不爱出门的人。虽然我很向往旅行，但总是因为各种原因，自我推脱，只能隔着屏幕看世界。但是在得知学校有交换的项目的时候，想要做出改变的我，怀揣着满腔的激动与不安，毅然抓住了这次留学的机会。于是，我循着从未有过的流程，一步步踏入了日本，来到了和歌山。

说来惭愧，我对和歌山的第一印象停留在一个梗——坐错车了，被发配到了和歌山（因为来大阪旅游的人经常坐错车）。刚到日本的我也有这样的困扰，车站复杂，感觉很可能就坐到奇怪的地方去。一顿查阅搜索后，拎着大包小包，我总算是到了和歌山站。过于疲惫的我没有第一时间去感受和歌山的风光，只是一心向着宿舍走。当我终于来到了五楼的房间门口，往外一望，被夕阳染红的晚霞，与日式小平房，这种似乎从来只出现在屏幕中的画面，直直的映入了我的眼帘。我想，这次，我来对了。

在中国，有一种说法是：日本的灵魂在乡下。我想这应该是一个没有恶意的刻板印象。高楼稀少，稻田遍地，换来的是澄澈的天空和清新的空气。走在和歌山的小路上，抬头便是没有遮挡的天空，路边有遛着狗相遇而闲聊的人们，窗帘里时不时窜出猫咪，电车伴随着电铃声缓缓驶过，世界仿佛按下了减速键。虽然只是初来乍到，但我觉得和歌山的灵魂就寄存在这样的生活节奏中。也许所谓的发配和歌山并不是什么坏事吧。

因为是四月份来到的和歌山，恰好赶上了樱花季。终于有机会能亲眼看到从来只是出现在视频中，照片中的樱花，我难掩激动，出门寻找起了樱花。和歌山的樱花在关西地方都特别的有名。原以为只有景点才会有樱花树，但是和歌山没有“特定”，仅仅只是路过的小寺庙旁，都能看到樱花满开的美景。那就更别说和歌山城盛宴般的樱花了，周围的樱花仿佛成海，托举起了天守阁，实在是让人流连忘返。同时，上学的路上，我也看见了紫藤花，去超市的路上也看见了“请呵护花”的标语，和歌山真是到处充满了花的韵味。

此外很值得一提的是，和歌山的猫。提到和歌山，很多人都会想起小玉电车吧，电车治愈的外观与内设让无数爱猫人士驻足。除此之外，我看到的和歌山似乎总和猫相关联。首先，和歌山大学的吉祥物便是一只橘子猫，更是专门开设了猫猫部，聚集了大批猫派人士。我经常去的商场里，有以猫为主题的烘焙店，路上也是见到了不少散步的猫。也许猫猫们，也特别钟意和歌山的悠哉气氛吧。土耳其有爱猫之城伊斯坦布尔，我眼中的和歌山，也是如此。

最后不得不提和歌山的友善了。对听力口语并不是很有自信的我，原以为会困难重重，但是在国际交流课的帮助下，我比较轻松的完成了初来日本的许多事宜。在课程上，我担心听不懂老师们的讲话，但是老师却很自然地使用着易懂的日语。无论是课程上还是下课后，大家都乐呵呵地挂着笑颜。这也恰恰印证了我路过的寺庙门口贴的标语——笑容传递着幸福。在和大的生活，在和歌山的生活不断地向我传递着幸福。